

不安定雇用と若年女性

飯島 裕子

ノンフィクションライター

はじめに

1990年後半以降、若者の雇用を巡る状況は大きく変化し、30代の3人に1人以上が非正規雇用という状態が続いて来た。不安定雇用に滞留する若者たちは、当初、「働く意欲のない若者」として激しいバッシングの対象となったが（本田ほか・2006）、その後、若者研究や労働研究などさまざまな分野において実証研究が進められた結果、日本型雇用システムの解体を背景に若者の雇用の劣悪化、不安定化が進んでいること（熊沢2006、後藤2011ほか）が明らかにされていった。

こうした実証研究やメディア等で取り上げられる事例は若年男性が中心であった。しかし、若年女性が置かれた状況も同様に厳しく、15～34歳の女性の2人に1人は非正規雇用、うち8割が年収200万円に満たない状況が続いている。非正規雇

用比率は、女性が男性に比べ、常に1.5～2倍ほど高い比率となっている¹。また男女間の賃金格差は以前から問題になっているが、非正規雇用においても大きく、男性222万円に対し、女性147.5万円と男性の六割程度にとどまっている²。

男性に比べ、非正規雇用から正規雇用への転換可能性も低く、貧困率が高いことも明らかになっている。にもかかわらず、若年女性の雇用の不安定化、貧困化について取り立てて問題とされることは少なかった。

そこで本稿では、筆者が40歳未満の女性30人に対して行った聞き取り調査³をもとに不安定雇用に従事する若年女性に関する分析を行うこととする⁴。

事例分析

事例A（24歳）大卒→正社員雇用→非正規雇用

大学卒業後、子ども向けの英語塾に就職しました。就職活動をしたのは、就職氷河期の真っ只中。エントリーシートを100社以上送りましたが、就職先が決まりませんでした。英語塾の仕事はハローワークで見つけましたが、典型的なブラック企業だったんです。毎日とにかく忙しく、朝8時から夕方5時まで授業運営、そこから事務処理に終わり、終電が当たり前という状況。6人にいた同期は次々に辞めていき、さらに仕事の負担が増えて行きました。私は次（の就職）を決めてから辞めるつもりで

いいじま ゆうこ

東京都生まれ。ノンフィクションライター、大学非常勤講師。一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了、博士後期課程在籍。大学卒業後、専門紙記者、雑誌編集を経てフリーランスに。

著書に『ルポ貧困女子』（岩波書店、2016年）、『ルポ若者ホームレス』（筑摩書房、2011年）、「若年ホームレス析出メカニズム—路上への経路分析を手がかりとして—」『日本労働社会学会年報第23号』日本労働社会学会等がある。

いたのですが、終電での帰宅を繰り返すうちに突然泣き出したり、感情をうまくコントロールできなくなってしまって、このままいったらヤバイと思って辞めました。

その後すぐに転職活動を始めたのですが、またブラック企業だったらと思うと気持ちが前に進まず、半年ほど過ぎてしまいました。そんな時、小学校の臨時教員の募集があることを知り、応募。採用されました。仕事は楽しく、やりがいを感じています。労働時間は短く、体力的には心配ないのですが、手取りだと月8万円程度。1年契約なので将来の保障はありません。実家暮らしでなければ、この仕事は選んでいないでしょう。終電で帰るような毎日を考えると正社員に戻りたいとは思いません。収入を増やすため、アルバイトの掛け持ちも考えています。

事例B (29歳) 高卒→非正規雇用

高校を卒業した後、複数の職場を転々としてきました。私の住んでいる地方にはなかなか求人がないんです。高卒後、すぐに入った不動産会社は働きやすい職場だったのですが、会社の業績が悪化し、リストラの対象になってしまいました。その後は、歯科助手のアルバイト、資材会社の事務職など次々と仕事を変えました。資材会社で3年働いた後、電気店の仕事を見つけました。時給は最低賃金の750円。電気店は高齢の夫婦が営んでいる店で、従業員は私一人。奥さんの干渉がものすごく、私の行動すべてをチェックして批判するんです。庭の掃除や自宅の大掃除までやらされました。そんな生活を続けているうちに夜眠れなくなり、医者に行ったらうつと診断され、仕事を辞め、退職。でも次の仕事を探せる状態ではありません。高校卒業後から一人暮らしをしてきました。幼いころ母を亡くし父は再婚し、新しい家庭があるため、頼れません。どうにもならないので、役所に相談したところ、生活保護を勧められました。

半年間、生活保護を受給して心身を整え、現在勤めている飲食店の事務バイトの仕事が決まりました。月収12万円。家賃を払うとあつという間になくなってしまいます。正直、生活保護を受けていた

時のほうが精神的には余裕がありました。今もまだ精神科に通っている状態なので、いつまでこの生活を維持できるか、不安な毎日です。

事例C (39歳) 短大中退→非正規雇用

短大中退後、非正規の仕事を転々としてきました。スーパー、ペットショップ、配送業、レジャー施設、旅館、大手雑貨店、データ入力……経験した仕事は数知れず。あまりに数が多くて自分でも覚えていられないくらいです。私は人間関係に苦手意識があつて、相手から攻撃されることが多い。それで職場に居づらくなり、退職する……ということの繰り返しです。

短大ではいじめられたとかそういうことはないのですが、まわりが華やか過ぎて周囲から「私のいる場所ではない」と言われているように感じて通うことができませんでした。

短大を中退した後、しばらくは自宅で何もしない生活を送っていました。友だちと連絡を取る気になれず、自分から連絡を絶ってしまいました。就職に関しても、誰に相談すればいいのかわからず……学校を中退してしまうと何の支援も受けられないんですよね。

母子家庭に育ち、今は母と伯父と一緒に暮らしています。母のパート収入と伯父の年金を合わせ、生活はギリギリです。母もいずれ働けなくなるでしょう。この先、一体どうやって生活していくのか考えると不安しかありません。

職場も小刻みに変わっているのでも、自分の所属先と言えるようなものがずっとない状態が続いています。主婦だったら無職でも家庭に居場所があるだろうし、学生なら学校に居場所があるでしょう。でもアラフォー近くで結婚していなくて無職だと、世の中から完全に取り残されてしまっているような感じがあります。

まとめ

(1) 劣悪な職場環境の蔓延

聞き取り対象者30人のうち、正社員経験があ

る人は14人だったが、そのうち11人が、事例Aのように、過労や精神的ストレス、パワハラなどによって、数年での離職を余儀なくされている。退職後も派遣やパートを繰り返し、安定した仕事に就くことができない人や、前職での経験がトラウマになり、働きたいけれど働けない状況に追い込まれている人も少なくない。

2016年、電通に勤める総合職の新入女子社員が自殺し、労災認定を受けた事件が大きな問題となった。学歴が高く、就職氷河期にもかかわらず正社員の内定を得られた、一見、恵まれた立場にいる女性たちだからといって安泰とは限らない。

“ブラック企業”⁵という言葉が広く知られるようになったが、しかし、女性たちの話からは、大量採用、大量離職というわかりやすいブラック企業だけでなく、上司や同僚からのイジメや人間関係トラブルなど、就労継続を困難にさせる状況が蔓延していることがわかる。背景には成果主義やゆとりのない職場環境があるのだが、しかし多くの場合、「仕事が覚えられない自分が悪い」「人間関係をうまく処理できない私に問題がある」と自己責任に帰結させてしまいがちだ。

また“ブラック”的な働き方は、非正規においても広がっている。聞き取り対象者30人のうち、職場でのイジメやパワハラなど、トラウマとなるような経験をしたことがある人が17人にのぼっている。劣悪な職場環境によって受けた傷は、場合によってはその後の人生にも大きな影響を及ぼしていく。女性たちの大半は正規雇用など現在より条件の良い就業を希望しているが、実際に就職活動をしている人は少ない。初職で受けた心身のダメージが大きく、その後の就業に困難を来しているケースが少なくないことがわかる。

(2) 拡大する非正規雇用

事例Bのように、学校卒業後、非正規雇用で働き始めた人が11人いた。不安定な非正規雇用の場合、一人暮らしを維持するのは容易なことではない。失業や体調不良など、ちょっとした理由を引き金に仕事を失い、すぐに貧困状態にまで陥ってしま

うことが明らかになった。

聞き取り対象者30人のうち、正社員就職した14人の学歴は13人が大卒、高卒は1人のみであった。学歴が低い場合、就職の際、不利になることはさまざまな研究でも示されている。2000年代以降、若年層の中でもとりわけ高卒者の就職は厳しい状況が続いている。

若者の雇用状況の悪化に加え、90年代半ばに、女性の大学進学率が高まり、4割を超えたことの影響もある。かつて高卒女性を中心に占めていた事務職などが大卒女子に取って代わられるようになった。さらにサービス経済化の進展により、販売員やウェイトレスなどの需要が増えているが、いずれも雇用の非正規化が進んだ職種である（小杉、2010）。こうした背景も高卒女性の就職状況をより厳しいものにしていく。

一方、大卒でも正規雇用を目指しながら、就職活動がうまくいかず、が見つからなかったため、やむを得ず非正規雇用を選んでいる人も少なくない。大卒後、そのまま非正規雇用に就いた人のうち、図書館司書、学芸員、公務員、教員、大学職員（いずれも非常勤）など非正規化が進んでいる仕事に従事している人が6人いた。非正規化された職種には、女性就業者比率が高い職種が多く（竹信・2015）、こうした背景も女性たちの雇用状況に影響を及ぼしているといえることができる。

(3) 社会的孤立

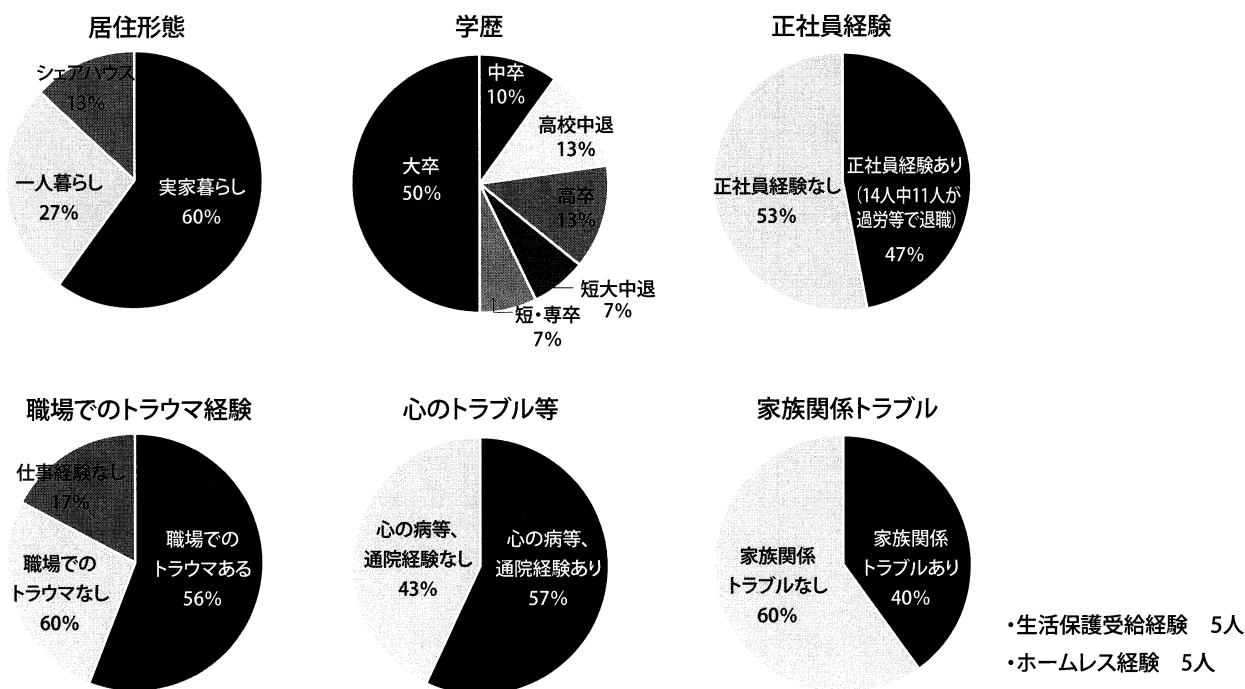
調査を通して、悩みがあっても誰にも相談することができず、社会的に孤立している若年女性たちが少なくないことがわかった。

聞き取りをした30人のうち、高校を中退した人が4人、短大を中退した人が2人いた。理由はイジメによる不登校のほか、家庭の経済的事情によるものもあった。学校を中退したまま、社会との接点を見い出せず、自宅にひきこもって過ごす人は多く、事例Cが直面したように、孤立し、困難な状況に陥ることが少なくないこともわかった。学校中退経験がある女性たちの多くは、中退によって学校での人間関係が途切れてしまっている。さらにその後、自

図表1 若年シングル女性(30人)の間取り調査結果

若年シングル女性(30人)

非正規職or 無職/年収200万円未満/就職氷河期世代(72年生まれ以降)



(出所) 著者作成。

宅にひきこもりがちな生活を送っている女性の場合、家族以外の人と繋がることのできる機会はほとんどない。

また非正規雇用を繰り返しているケースでは、職場の同僚と継続的な関係を築くことが難しい場合が多い。さらに年齢を重ねるうちに、シングルである自分と、結婚して子育てをしている友人の状況が異なっており、悩みを打ち明けることができないという声が多く聞かれた。

(4) 女性活躍推進の陰で

政府は女性活躍⁶を掲げ、女性管理職比率の上昇や女性活躍推進法の施行など、女性の労働力化を推し進めている。少子高齢化により、労働力人口が減少する中であっても、女性の就労率は2000年から現在まで、年々上昇を続けている。しかしながら、実際に就労率が上昇しているのは、非正規雇用であり、若年女性の置かれた状況に大きな変化はないように見受けられる。

調査から明らかになってきたのは、女性が一人

で稼ぎ、生きて行くことの困難であり、“活躍”とはほど遠い、非正規(もしくは)無業に滞留し続ける女性たちの存在であった。

女性の就労率は出産、子育て期に減少し、中年期に再就職することで再び上昇するM字カーブを描いてきた。女性活躍の柱として、M字カーブからU字カーブへ変えていくよう、出産、子育てでキャリアを中断させないための支援が行われている。

一方で、不本意非正規で低賃金で働くシングル女性や女性の大半が従事する非正規雇用の改善はほとんど行われていない。今後も未婚率は上昇し、非正規シングルに滞留する女性たちは増えていくであろう。女性活躍推進の後ろ側で顕在化されづらい女性たちの困難を把握し、必要な対策を打っていく必要がある。■

《注》

- 2012年、20～29歳の非正規雇用比率は男性28%、女性42%である。
- 2014年「民間給与実態統計調査結果」国税庁より。

- 3 ①非正規雇用あるいは無業、②年収200万円未満、③就職氷河期世代（1972年以降に生まれた）30人のシングル女性（ただしシングルマザーは含まない）に対して聞き取り調査を実施。調査対象者は、生活困窮者支援組織や労働組合、知人、都道府県の女性センターなどの紹介による。インタビュー調査の項目は、現在の仕事の状況、これまでの仕事の状況、現在の暮らしの状況、家族との関係、子ども、学生時代、今後の希望についてなど。
- 4 詳細な統計については、図表1を参照されたい。
- 5 『ブラック企業』（2012）今野晴貴によれば、主に新興産業において若者を大量採用し、長時間労働によって使い潰し、離職に追い込む企業を指す。
- 6 2015年に「女性活躍推進法」が成立。従業員301人以上の大企業、国や地方自治体に対して、女性登用に関する数値目標を含む行動計画の策定と公表を義務づけている。公表される項目は、女性採用比率、男女による平均勤続年数の差異、一月平均の時間外労働時間など14項目から企業が選択して決めるが、派遣労働者に占める女性労働者の割合という項目はあるものの、大半は、正規雇

用や管理職の女性に関する項目のみである。また従業員が300人以下の中小企業等では、努力義務に留まっている。こうした状況からも女性活躍推進法はごく一部のエリート女性のみに向かっており、中小企業に働く女性はもとより、女性労働力の6割を占めている非正規雇用に従事する女性たちは無視された形となっているのが現実と言える。

《参考文献》

- 熊沢誠、2006、『若者が働くとき—使い捨てられも「燃えつき」もせず』
- 小杉礼子 a、2015、「若年女性に広がる学歴間格差—働き方、賃金、生活意識」『下層化する女性たち』小杉礼子、宮本みち子編勁草書房
- 後藤道夫、2011、『ワーキングプア言論—大転換と若者』
- 竹信三恵子、2015、「官製ワーキングプア—国が生む貧困と行政劣化」KOKKO 第9号、日本国家公務員労働組合連合会、堀之内出版
- 本田由紀、内藤朝雄、後藤智和、2006、『「ニート」って言うな』光文社

